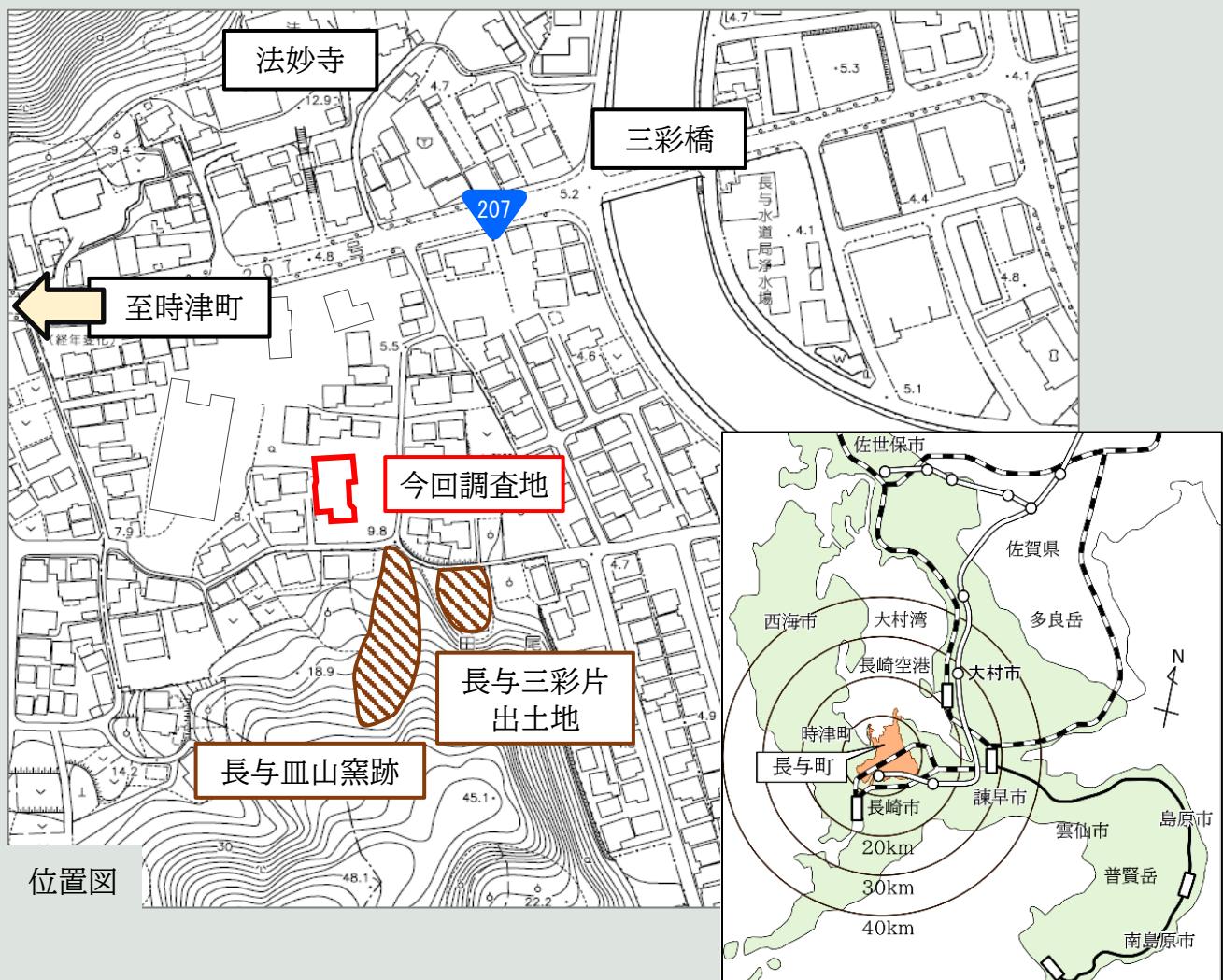


長与皿山付近で窯跡発見 現地説明会資料

今回の下図の調査地にて、隣接する長与皿山窯跡と長与三彩片出土地に関連する場所として、発掘調査を行いました。

長与皿山窯跡と長与三彩片出土地は、長崎県西彼杵郡長与町嬉里郷田尾に位置し、江戸時代に長与焼を焼いた窯跡と考えられている遺跡です。

長与皿山窯跡は全長約115mの巨大な登り窯跡で、長与三彩片出土地は、弘化2(1845)年に長与焼を再興した渡邊作兵衛の敷地だった場所であり、平成17(2005)年に実施した発掘調査で長与三彩の平皿破片が出土したため、何らかの窯もしくは工房があったと考えられている場所です。

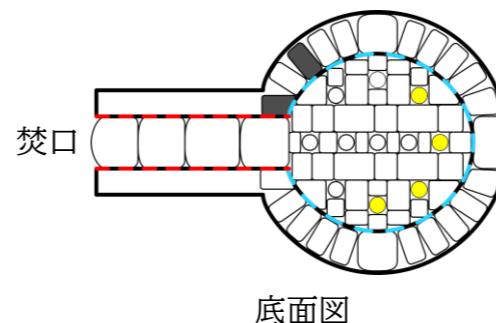
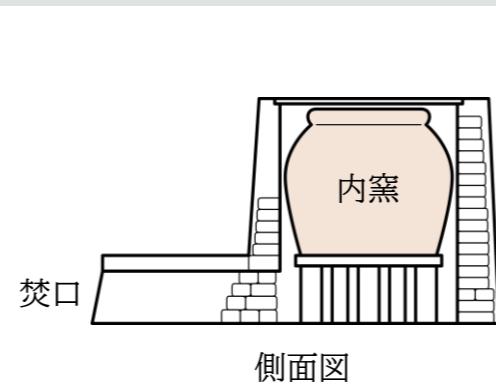
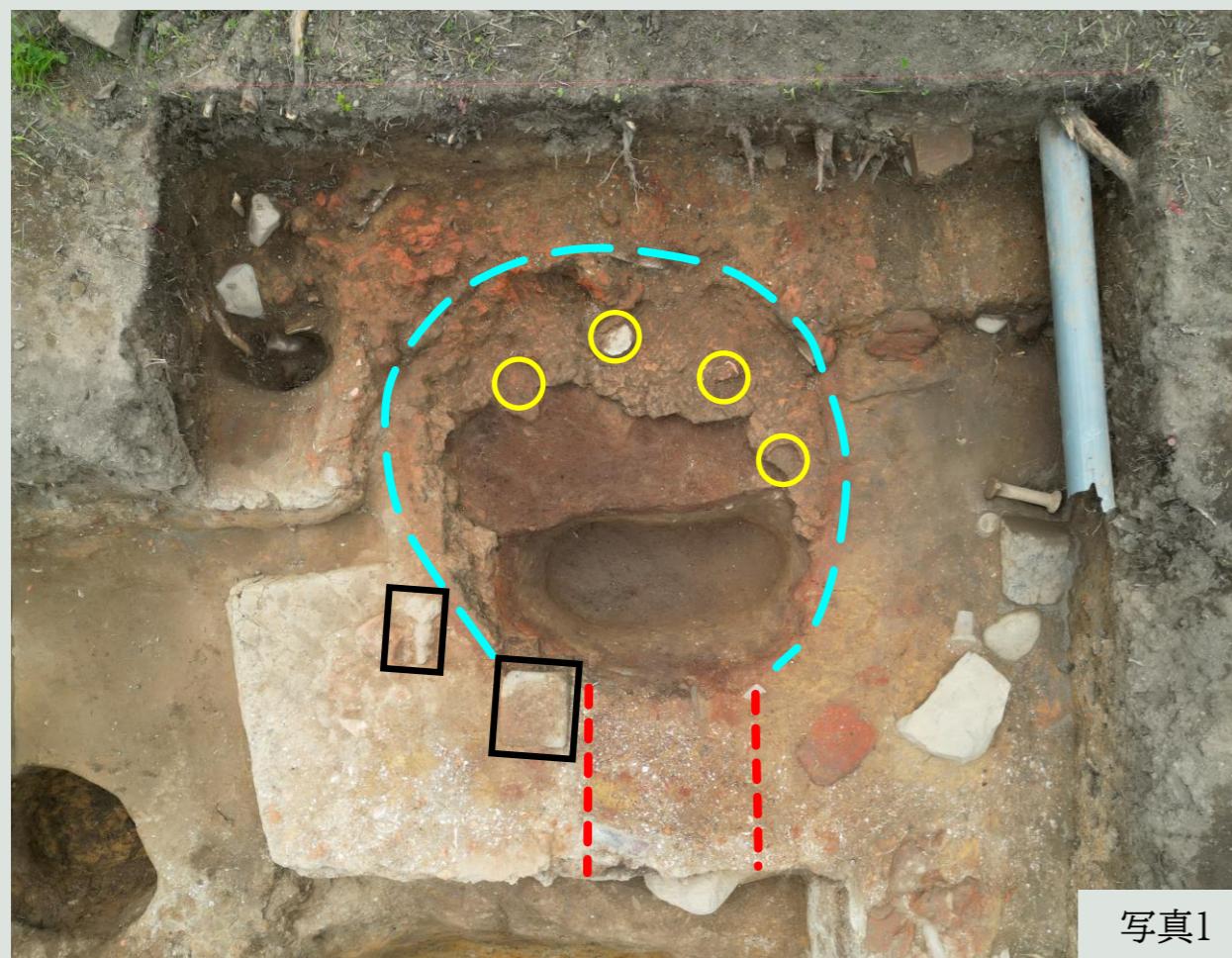


今回出土した窯跡

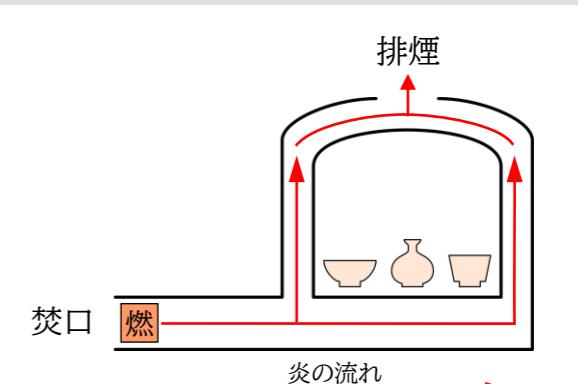
調査した試掘坑の1つから窯跡と思われる遺構が出土しました。

この試掘坑では焼土の拡がりが確認されたため、範囲を拡張して精査を行いました。その結果、焼土の範囲を確認できたほか、焼土の周辺を礫および煉瓦で囲んでいることが確認されました(写真1黒四角)。また、約10cmの円形の窪みが数か所確認され、その窪みは円形を描くように配置されていました(写真1黄色丸)。なお、窪みの1か所には窯道具であるハマが埋まっているほか、東側の一部には焼土が確認されず、一部土色が異なっています(写真1赤破線)。この部分は焚口である可能性が指摘されています。

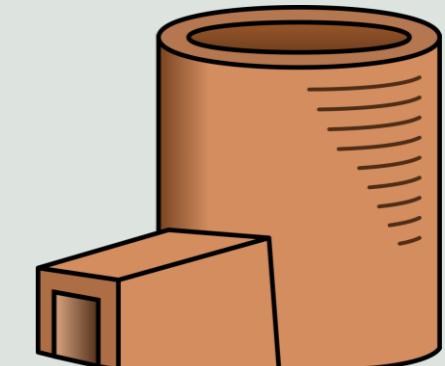
以上の特徴から窯跡である可能性が高く、素焼窯にしては少しこういため、赤絵窯(全国的には色絵窯と呼ばれる)であった可能性が考えられます。



(参考図1)赤絵窯の構造模式図



(参考図2)赤絵窯の焼成イメージ図



(参考図3)赤絵窯のイメージ図

焼き物ができるまで



今回の調査のまとめ

今回発見された窯跡は、赤絵窯跡である可能性が高く、江戸時代(近世)の赤絵窯跡であれば、県内では初めての発見であり、九谷焼(石川県)や京焼(京都府)のものが知られるのみで全国的に見てもかなり珍しいものです。

これまでの発掘調査では、登り窯の他には窯跡は発見されませんでしたが、長与三彩は、温度が1,300℃前後に上がる登り窯では焼成が難しく、別の窯で焼かれた可能性が指摘されていました。今回新たな窯跡が発見されたことは、長与焼や長与三彩の生産に関する研究に大きく寄与するものと思われます。

この窯跡が長与三彩を焼いた赤絵窯である可能性がありますが、今回の調査では長与三彩片は出土していません。また周辺にこの窯跡に関連する施設等の遺構がある可能性も考えられるため、今後調査範囲を拡張し継続して調査を行い、出土品による窯跡に関する詳しい情報の収集や関連遺構の有無の確認などを行うことにより、長与焼や長与三彩についての究明を進めていきます。

文責:長与町教育委員会 ※無断転載禁止



平成17(2005)年実施した調査で出土した長与三彩の平皿破片